

ファンにやさしい
馬学講座

第1回

競走馬が走る
本当の理由とは？

今月の講師

楠瀬良さん
(JRA競走馬総合研究所)

text by Akihito Tsujiya

芸人にぶつけられた
素朴な疑問に関する疑問

昨年末、テレビのある人気深夜番組で、競馬がかなり大きく取り上げられた。

毎回決まったテーマについて、人気芸人たちがトークを繰り広げるといふ番組で、この日のテーマが「競馬」。競馬好きの「競馬芸人」たちが、それぞれの競馬観やお気に入りの馬について思い入れたっぷりに語る、なかなか面白い番組だったのだが、実はちょっと気になるところもあったのだ。

そのひとつが、「馬は好きで走っているのか。鞭で叩かれるのが嫌だから走っているだけではないのか」という質問が、競馬に詳しくない女性ゲストから出されただけだ。

これについて競馬芸人たちの一致した見解は、「馬はもちろん好きで走っており、

そしてレースに勝とうと思って走っている」というものだった。

そして、レース中に併走する他の馬を噛みつきに行く馬もいるというエピソードが、馬がレースに勝ちたいと思っていることの根拠としてあげられた。

これは、俺より前を走るんじゃないという馬の意思表示であり、隣の馬を攻撃（妨害）してでもレースに勝ちたい気持ちの表れだ、ということだろう。

さて、しかし、これは本当なのだろうか。馬はレースに勝ちたいから、隣の馬を噛みつきに行くのだろうか。

「レース中に隣の馬に噛みつこうとする馬は確かにいます。が、これはレースに勝つために、というより、社会的な順位づけをするための行動です」

と話してくれたのは、JRA競走馬総合研究所の楠瀬良さんだ。

馬というのは群れで行動する動物だが、そのグループの中には自然に序列ができ

あがる。いちばん強い上位の個体から弱い個体まで、順位づけが行われるのだ。その序列を決定する過程で、相手に噛みつきなどの行動が見られる。そうやって強い馬、弱い馬が決められていくわけだ。

楠瀬さんによれば、レース中に隣の馬に噛みつこうとする馬は、この順位づけ行動をレース中にやっているのだという。

同じレースの出走馬というグループの中で、上位の序列を獲得するための行為なのだ。ただし、序列が相手より上位になるのは、相手が「参った」と逃げていったときであって、レースに先着したときではない。レースの着順は序列の決定に関係していない。

「だから、レース中に他馬に噛みつく馬というのは、レース以外のことに気を取られている、レースに集中できていない、ということができません。レースで能力をいかんなく発揮するという面からは、好ましいことではありません」



JRA

97年のフェブラリーSを制したシンコウウインディは、それに先立つ96年、館山特別の直線で他馬を噛み付きにいて、クビ

馬が他馬に噛みつく理由、その真相とは？

この「勝つために他馬に噛みつきにくい」という話は、かなり昔、少なくとも30年前から言われていたことで、これが未だに生きていたことに、実はちょっと驚かされた。これだけ広く、長く語られ続けているのは、このエピソードがひじょうにわかりやすい、いわば「座りのいい」ものだからだろう。

私たちが人間は、競走をやったら勝ちたいたいと思う。陸上競技の選手たちはそのために苦しい練習に耐えている（それだけ勝ちたいと思っている）のだし、運動会のかけっこだって、負けるよりは勝った方がずつといい。

人間がそんなのだから、馬だって同じに違いない、という思い込みが、どうも私たちにはあるようなのだ。そして、その「思い込みによってあらかじめ用意された結論」、つまり「馬はレースで勝ちたいと思っっている」を補強するために、

都合のいいエピソードが採られることになる。

そこで見つかったのが「隣の馬に噛みつく馬」の話だ。人間だって競走に勝ちたいときは、隣を走っている選手に肘を引っかけ前に出さないうらいのことはする。それと同じだろう。馬は勝つために隣の馬に噛みついていくのだ。そうに違いない、というわけだ。しかしこれはすでに述べたように、残念ながら行動の本来の意味からは離れてしまっているのだ。

この「勝ちたくて噛みつく馬」の話は、もともと人間のメンタリティを基準に組み立てられたものなので、とてもわかりやすい。納得しやすいのだ。だからこそ、競馬や馬についてはかなり詳しいはずの競馬芸人たちも、全員がこのわかりやすさに引っぱられてしまったのだろう。

馬は競走することを「仕事」だと考えている

もうひとつ、先の女性ゲストが抱いた素朴な疑問「馬は走りたくて走っているのか」の方はどうだろう。引き続き、楠瀬さんに話していただく。

「野生の状態では馬が走る場面というのは、肉食動物に襲われたとき。これは馬にとつてあまり歓迎できることではありません」

馬たちが全力で走らなければならないシチュエーションは、実際には起きないにこしたことはないわけだ。そして不幸にも起こった事態が起きたときは、好き

嫌いにかかわらず全力で走らなければならない。

「また、レースでは限界まで体力を使わなければならないから、身体的にはひじょうなストレスになる。これも嬉しいこととはいえないでしょう」

走りたくて走っているとは、どうも考えにくいようなのだ。

ただし、と楠瀬さんはいう。「だからといって、『馬は本当は走りたくない。それを人間が鞭で叩いて無理やり走らせている、レースに出している』と考えるべきではありません。そこまで馬を擬人化してしまうと、また間違いを犯すことになる。おそらく馬は、レースに出るのは仕事だと考えています。馬にとつてレースとは、それ以上でもそれ以下でもないでしょうね」

「噛みつく馬」にしても、「無理やり走らせる馬」にしても、どうも私たちは、馬という動物を自分たち人間の側に引っぱって考えがちのようだ。もちろんそれは、馬を身近に感じたり、競馬にドラマを見いだしたりするためには有効なテクニックではあるのだけれど、何事もやりすぎはよくないということだろう。

あれこれ考えすぎず、むしろ馬という動物を、もっと素直に（もつたいぶって）いえば虚心坦懐に見ることで、いままで見えなかった馬の魅力、競馬の新しい魅力に気づくことがあるのかもしれないという気がする。

それを見つめるお手伝いができれば、この連載を始めます。しばし、おつきあいのほど、お願い申し上げます。

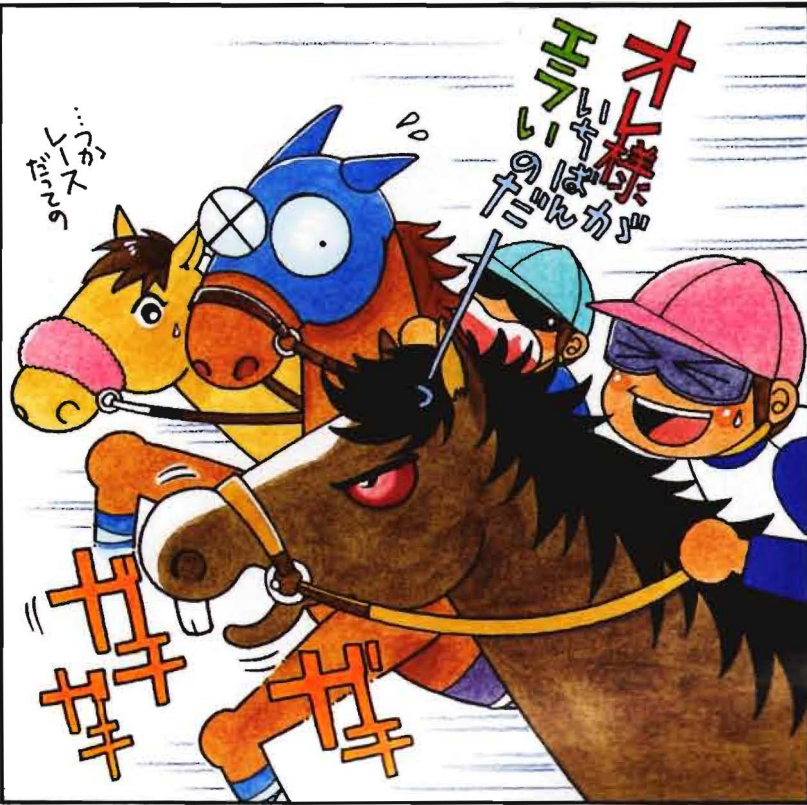


Illustration by Junko Agi